月刊

立川と語ろう　立川に生きよう

えくてびあん

11

創刊100号記念

<EKUTEBIAN VOL.11 NOVEMBER 1992 EKUTEBIAN>

まい　あーと■日本画「或る日」
by 萩須葉子

TACHIKAWA グルメどき ① 新連載

豊泉辰雄の Merluza a la Parrilla "Salsa de Negro"

（メルルーサとパーナ貝のグリル、黒衣のソース添え）

豊泉辰雄さんは、錦町2丁目でスペイン料理店『TAPAS』（タパス）を昨年十月に開店。一年を経て、ようやく軌道にのりはじめた。彼は料理専門学校を卒業後に沖縄（「コスタ・ブランカ」）で修行、豊富な魚介を駆使しての料理術を身につけて立川で専門店をオープン。店名のタパスは「小皿料理」の意味だが、どうして、大皿を自由にこなす。スペインではバレンシア、アンダルシアなどの地方性ゆたかな料理をもっているが、今回、豊泉さんがウデをふるったタラ科のメルルーサとパーナ貝に烏賊スミソースをあしらった「メルルーサとパーナ貝のグリル、黒衣のソース添え」はバスク料理のスペシャルテ。店のメニューには載せていないが、一度は挑戦したかったと豊泉さんが語る逸品。

撮影：井上義治

百歳記念

奇しくも今年、敬老の日の前日に百歳を迎えた早瀬辰次郎さん（富士見町）。お祝いに駆けつけた、早瀬一族、ゆかりの人々三十数人にかこまれて辰次郎さん、会心の笑顔。明治二十五年の生まれ。いうまでもなく、この日本が揺れに揺れた百年。その中をくぐって今日、命あるのが不思議とのひと言には、さすがに重量感がある。警察官の仕事を全うした傍ら、俳画の趣味をもつ風流人。そして、ついに「俳画展」（中央公民館）を開催するという快挙。百歳記念個展！　生命賛歌をとくとご覧いただこう。

早瀬さんにとっては孫、ひ孫さんたちに囲まれてのひと時が、一番たのしい。個展会場にヒューマンな空気が流れる。

祝賀会での、堂々たる謝辞は百歳ともおもえない。

バースデーケーキを前に、ご親族の方々と。

ベレー帽もバッチリきまっての、晴れの姿。

個展会場に登場したのは、長年の作品群から選抜された。俳号を「術雨」という。

一族、これだけ揃うと「子々孫々」という世界を眼のあたりにする思い。ありがとうの拍手が会場に響き渡った。

立川トピックス

先生は、またまた日本記録

「本当は記録なんていいんです。マスターズから何か大きなものを教えてもらっているんだと思います」と謙虚に語るのは9月11日に行われた第13回全日本マスターズ陸上競技選手権大会400㍍M60（60〜64歳の部）で59秒4の日本最高記録を達成した真鍋靈彦さん（60歳）。

真鍋さんは昭和第一学園高校（栄町）の理科の先生。M50（50歳〜54歳）の日本記録保持者でもある。「何年か前、外国の女性マラソンランナーが白いパンツを真赤に染めてゴールインしたその姿が世界中の人に感動を与えたように記録よりも何かできないか」と語る真鍋先生は今夜もトレーニングに出かけた。

体重の3倍を持ち上げた男

「できなかったことができるようになる。ここがパワーリフティングの魅力でしょうか」と答えたのは10月4日に行われた第29回東京都パワーリフティング選手権大会56kg級で優勝を獲得した、立川トレーニングセンター（曙町、木島会長）所属の佐宗誠二さん（29歳）。今回も多くの入賞者を輩出し、指導に定評のある木島会長は言う。

「体重の3倍以上あげると全日本クラス。佐宗は55kgの軽い体重で160kgあげますからこれからも有望」と。ちなみに2位は110kg。自分との闘いを好む男たちのジムは、さわやかだった。

真如苑だより

11月になると、お諏訪さまで「菊まつり」があり、立川の菊花愛好会の皆さまが丹精して咲かせた作品が出揃います。秋冷のなかを「菊香る」とは、まさにこのことなのでしょう。

隣はなにをする人ぞ、などとおっしゃらずに、皆さまお揃いで、どうぞ、お出掛け下さい。

秋冷の候、真如苑では皆さまのお越しを、こころからお待ち申し上げます。

■日時　11月15日(日)
　　　　2時〜4時

■御本尊、真如宝物館をはじめとして映画など盛りだくさんの用意がしてございます。

■お申し込みは「えくてびあん・コンパニオン」（本誌を手渡してくれた人）へ。

五線譜の上で言葉がキラキラ

言葉が輝きを持って、生き生きと動いている。こんな日本語が五線譜の上で自然に踊る日本の童謡。オペラのアリアが、シャンデリアの輝きであれば、童謡の白秋は、ぞくっとさせるカットグラスのキラメキであろうか。誰もが慣れ親しんだ「ペチカ」や「この道」。振り返って、日本人に考えさせてくれるものを与えてくれる。日本語に熟達した詩人たちと西洋音楽を導入することに生命を賭けてきた両者がお互いに妥協しないで作ってきた。だから、童謡には永遠の新鮮さがあるのだろう。

▲錦町の自宅にて

▼リサイタルのパンフレットから

▼生誕百年リサイタル、立川市民会館にて

▲最近、出したＣＤ

▲余念のない練習の跡が見える楽譜

◀白秋の故郷、実家近く、からたちの木の下で

●白秋がライフワークです

その新鮮さに打たれ、25年間、白秋を歌い続けている声楽家、新垣寿子さん（錦町）。白秋生誕百年リサイタルを立川市民会館にて。そして、今回、没後50年リサイタルを府中の森芸術ウィーンホールで開いた。リサイタルを前に白秋の故郷、九州の柳川を訪ねた。新垣さんはこう語る。「白秋の実家の二階へ上がって、窓から周囲を見渡すと、水回りがよくて、未だに蟹があちこちに見られた。ふと、その時思い浮かんだのは、『ちょっきん、ちょっきん、ちょっきんな』の『あわて床屋』のメロディー。歌の歌詞からも、そのあたたかい風土と人柄が滲み出ている」と。まるで、子供の頃見た空の色まで、アルバムをめくるように蘇らせてくれるようだ。

●言葉のキラメキをそのまま

『ペチカ』、『からたちの花』『この道』。誰でもが、お年寄りから若者まで、一度は耳にしたことがあり、また、一度聴いたら、すっと、心の芯まで響いてくるメロディー・フレーズ。「雪の降る夜は…」、「この道は、いーつーか、来たみーち」。口ずさむほどに心も五線譜の上で踊っているようだ。しかし、この言葉のしみじみとした豊かさに引っ張られるようにして、新垣さんは、さらに言葉をはっきりと歌いたいと思うようになった。

その思いは36歳の時、アナウンス学院へと通わせた。若者に混じって一人、早口言葉から、心を伝える言葉の出し方まで学んだ。また、聴衆とより自然なコミュニケーションの中で出来上がってゆくものはないか？それは、演歌コンサートから学べるのではないかと、美空ひばりのコンサートを徹底的にビデオに撮り、研究したという。観客に語りかけるようなものでないと白秋の詩の素晴らしさを削ってしまう。より生き生きとその思いを伝えたい。その気持ちは、お茶の間のテレビから舞台一つ一つにも絶えず研究をさせる。

●新垣さんから届いたメッセージ

新垣さんの人生の中で『この道』は、いつも歌う時々に違う新しさを与えてくれるという。

「熊本から一人、上京し、大学へ、そして、結婚し妻となり、子供が生まれて母となり、子供も成長して今も、そして、これからもその時々が人生のクライマックスだと感じさせてくれた」と。

そんな話を聞いていると、「白秋は、童謡で子供の頃、歌った」それだけでは、どうして、どうして、もったいないのではないだろうか？　没後50年の今年、最近、心に残る歌がなくて…という人が多い中に届いたメッセージではなかっただろうか。

わが瞼のムービー・ハウス

森　忠明●童話作家

九月下旬、砂川公民館で〈現代と文学〉について駄弁を弄する機会を与えられた私は、（参会者に御年輩の方が多かったので）このところ疑義が生じている二、三の点を、こっちから質問して逆レクチュアを受けることにした。

疑義とは大げさみたいだが、今年二月中央公論社発行の日野啓三著『断崖の年』に収載された短編の一節に、

"——立川でまた乗り換えると、家を出てから合計一時間も乗っていないのに、日頃男が知っている東京と違った世界に来ているのを感ずる。乗ってくる人たちの体の動きに無駄がある。会話の語尾がたたみこむように切れない。（略）"

という表現があり、その"体の動きに無駄がある"とは具体的にどんなふうなことなのか、"語尾がたたみこむように切れない"とは、やはり実際には如何なる有り様なのか、聴衆に御教示をあおいだのである。

後者については立川の本村たる柴崎町に長年住んでいた方に、懇切な説明をいただくことができたが、前者については皆さん微苦笑されるのみだった。"無駄"と表記した作者なり、登場人物の男（腎臓に大型の悪性腫瘍を発見された作者自身と考えて私は読んだ）の立川印象批評として、まあそんなぐあいに都心生活者には映るんだろうな、といった、やや自嘲気味の笑みではあったようだが、作者（男）の、心身ともにぬきさしならない立場を推量してみたとき、"無駄がある"あるいは"無駄ができる"ということは、単なる異郷への違和をこえた、渇望まじりの、衝撃的な発見だったのかもしれない——そんな解釈も地元ひいきゆえの見当はずれではないと思われるが、どうだろう。"無駄"といったら、私の下手な書き物などその最たるもので、私に文筆渡世を選ばせた元凶？であるところの立川市内の映画館と、そこで上映された多くの映画に、あたら有為の人生を狂わされた恨みを述べたい。というのは冗談で、昭和三十年代、市内にまだ十館ものムービー・ハウス（シネマ・シアターというよりこういいたい）があった日々を、熱狂的映画少年として過ごせたことを至福とし、師恩に似た市恩のようなものを強くおぼえる。

過日、多摩川図書館で『写真集たちかわ』（けやき出版製作）をめくっていると、なつかしの映画館のファサード十葉が掲載されていた。私は持参のむしめがねで、当時どんな作品が上映されていたのかたしかめてみたら、あの、細身で知的なレタリング（Chuo eigeki＝立川中央映画劇場）の下に2本立てのポスターがはってあり、いわく、

『旅情』
『暗路』

ロマンチックにリアリスチックをぶつけてバランスをとるところなど、清濁あわせのむ大度の町らしく、いかにも立川だ、と感動し、にこにこ満足していたら、向かいの席で宿題を片づけていた小学生に白い眼で見られた。（軽蔑するなかれ若者よ。このおじさんは丁度きみぐらいの頃、映画館の暗闇で、図書館で学ぶのとは別の、心的生活上の要諦を味得していたのだから。）あやしい人じゃないことをしめそうと、『写真集たちかわ』を極力優雅に書架へおさめたのだが、新館が建つまでの二年間だけとはいえ、この町からスクリーンが全て消えてしまうことを思うと余りに淋しく、私というおじさんの後姿には徒ならぬ悲哀がにじんでいたにちがいない。

ある真冬。たった一人の少年観客（私）の眼前に落下してきた巨大扇風機。天井板が腐っていたらしい。かくも恐ろしく愛すべき立川名画座も今は無い。

しかし、母恋忠太郎のごとく両の瞼をとじれば、わが青春の"無駄"時間を慰め励ましてくれた十館の全景や内装が、いつも鮮麗に浮かび上がってくるのである。

ことわざ問答㉜

漢字一字挿入せよ

天の時は□の利に如かず

□を同じくして塗を殊にす

100号記念の御礼

お陰さまをもちまして、『月刊えくてびあん』が創刊より一〇〇号を数えさせて頂きます。読者の皆さまのご支援あればこそと、ここに厚く御礼申し上げます。

指折り数えますと、百ヶ月前に編集活動をはじめたことになりますが、その間、わが立川市は市政五〇周年という大きな節目を迎え、そして今、多摩地域が東京都に移管されて一〇〇年にさしかかろうとしております。

歴史の大きなうねりの中で、『月刊えくてびあん』の存在などは、荒波にもまれる小舟にすぎませんが、小舟なりにジッと街を見続け、街が教えてくれることに耳を傾けてきたつもりでございます。

なによりも、多くの立川人と親しくして頂き「ベスト立川人・展」「頌の会」を通して、そのスピリットに触れることができましたこと、何物にも替え難い収穫でございました。

これよりは、精一杯「立川文化圏」に貢献できる冊子にならせて頂くことをお誓いし、今後とも変わらぬご支援を伏してお願い申し上げる次第でございます。

（編集部）

立川クイズ

最近、都道府県や都市の「住み心地」が、話題にあがっているようですが、このほど、人口10万人以上20万人未満の中都市111市を対象に行った「暮しやすさ度調査」（日経産業消費研究所、日経リサーチ共同調査）でわが街、立川市が全国ベスト10に入りました。就労機会住宅・環境、教育・文化度等6分野について各種、データを用いて都市別の偏差値をはじき出し、さらに各分野別の重要度に差を設けた上で総合の偏差値でランキングしたもの。ちなみに1位は松本市（長野）、東京では武蔵野市が2位に、立川の10位と2市のみ入りました。

さて、そこで問題ですが、この調査の項目のうちでないものは、次のうちどれでしょうか？

①利便性②都市基盤・安全性③富裕度

〔10月号の答〕❷

豊作を祈願してのものでした。そのことで町内の気持ちを一つにすることが豊作につながり大切だったのかもしれません。

表紙は語る

まい・あーと
日本画
『或る日』
by 萩原葉子

百号記念を飾ってくれたのは、萩原葉子さんの日本画『或る日』。昨年、立川ルミネで開催された、多摩総合美術展、日本画部門、大賞作品である。

「写実を使って、小説家の方が、小説やドラマを書くように現実とはちょっと離れている、写生ではなくて、自然の夢を表現したい」と言う萩原さん。それで、バックの枯葉とその前で自転車に乗っている子供はどこか妖気な雰囲気を醸しているようだ。「枯葉は人間の心のようで、話しかければ答えてくれるような気がして。だから、とても綺麗だと思っていたので、ずっと描き続けてきた」と言う。どっしりとした安定した画面にあえてしないのも心模様を大切にしているからのようだ。

女子美術大学で日本画を専攻して以来、30年のベテランである。中学校の美術教論を続けながら今も時間があれば帰宅途中の小金井公園で描き続けている。「絵を描いている時が一番落ちつくし、描いているからこそ、友達や師の生き方に触れられることが幸せだ」と言う。

東風

百号をお届けする。創刊の頃、はじめるのはいいが「三号雑誌」にならないように気をつけるんですね、と立川印刷所の鈴木開郎さんから云われ、以前にこんなタウン誌がありましたけれど、いつの間にか消えちまいましてね、続けるのは難しいですよう、と念を押された。三号雑誌というのは、はじめ勢い込んで三号目には息切れがして、まるで線香花火のような雑誌をいうのだそうだ▼発行日厳守を旨としてきたが、百号のうち三号だけ遅れてしまった。印刷が遅延したのではない、編集部の怠慢に過ぎない。なのに読者から、がんばってくださいと励ましのお言葉を頂く。そういうひと言が活動源になって、記者が街へくり出す▼百号記念に百歳の早瀬さんと巡り会えた。百歳までご存命の方は日本では今年四千人、だが、創作活動を続けて尚カクシャクの方は稀、いや、早瀬さんお一人かもしれない。記者はご無礼にも、わさわさとご親族のうちわの祝賀会まで押しかけてしまった▼辰次郎さんの口から「生きているのではありません、生かされてきたのです、天がそうさせてくれたのです」と聞くと、ズッシリと重いものを感じる。五十、六十の若造の人生論なんて、とても足下に及ぶものではない。記者はひとり呟いた。「えくてびあん」の百号なんて、まだ青臭い、青臭い▼人生の幕開けならん　えくてびあん

ことわざ問答 答

天の時は地の利に如かず

帰を同じくして塗を殊にす

月刊えくてびあん　第100号
平成四年十一月一日発行
発行所　えくてびあん編集工房
東京都立川市柴崎町1-3-37-103
磐城ビル3F　〒190
電話　〇四二五(28)〇〇八二
FAX　〇四二五(28)一二九七
編集人　立井啓介
発行人　沖野嘉男
印刷所　㈱大廣社

（編集）隅川理　名尾辰寛　中村裕里　原田悦子　平沢正弘　町田健一　山田恵子
（写真）天野武男　板橋一明　井上義治　スタジオ269　枝川一巳　本多修

金沢泰雄さん
(富士見町4丁目)
愛機→マミヤC330
■馬場先門の朝

私の傑作選

NO.16

NICE SHOT!

誰のアルバムにもキラリッと光る一枚がある。
撮れた！と思った。シャッターが軽い。

大貫芳樹さん
(柴崎町2丁目)
愛機→コニカFS−1
■夏の思い出